共に生きる
― 交流を通して思うこと ―

川内保育園　宇高　冨喜恵

「今日は、三恵ホームのおじさん達がこられるよ。おじさん達は、みんなとお話したり、みんなが遊ぶ姿を見たりすると、楽しくなって心が元気になるんだって」と話かけました。

「うん、知ってるよ、りす組（4歳児）の時行ったけん。」

「寝たままで、起きれん人もおった。」

「車椅子に乗って歩けんのよね。」

「なかなか、お話もできん人もいた。」等、前年度の経験を口々に話す子ども達です。

園生を迎えて、挨拶を交わしたり、自分達が作ったカードや紙飛行機を手渡したり、名前を教えてあげたり、鯉のぼりの歌を一緒に唱ったり、車椅子を押させてもらったりして過ごしました。

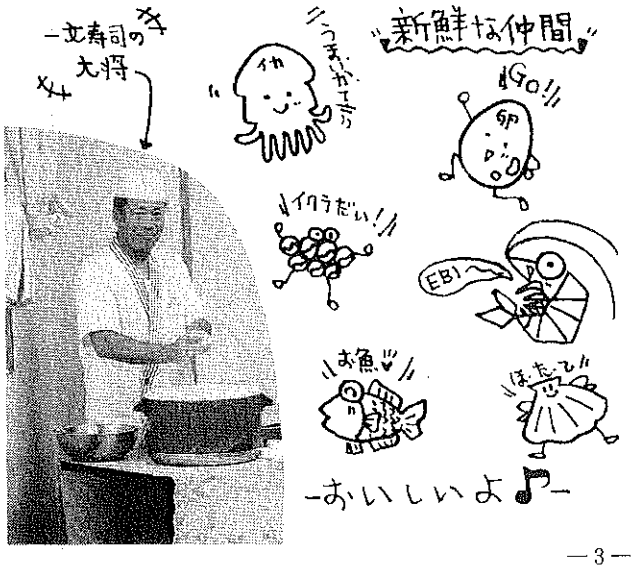
そのような4・5歳児に混じって、3歳児のD君は、最初からずーっと、ホームの方の車椅子の傍について離れません。ジィーッと顔を見て「へんなかお」と、何回もくり返します。傍で聞いている私は、「ドキッ」としました。思った事、感じた事をストレートに表現するのが子どもではあるけれど、初対面のOさんを、このD君の言葉で傷つけてしまうのではないかと、オロオロしてしまいました。しかし、Oさんは、にこにこしながら、「いいんよ、本当にへんな顔じゃもんなー。おいちゃんは、お酒飲み過ぎて病気になってしもうたんよ。お酒飲み過ぎたおいちゃんが悪いんよ」と、話して下さいました。D君は「へんなの」と言いながら持っていたプラモデルを「フン」と渡したり、手に触れたり、車椅子にさわったりして密着して離れません。それから車椅子も押させてもらいました。押すのもぎこちなく、走り出したら止めることを知らない子どもが押すのですから、乗っている方は、怖かったのではないかと思います。でも、にこにこして押されるままにされていました。一時間近くたって、ホームの方が帰られることを知ると、「帰ったらいかん」とくり返し、怒り出したD君。

そんなようすを見て、〝子どもってすごいなあ〟と思いました。外見で「変な人」と見ても、自分の心と身体全体で相手を読み取り、変な人が大好きな人として心から受け入れられるのですから。「健康な人も障害を持った人も同じ人間で仲間だ」と頭では理解していても、直ちに丸ごと相手を受け入れるということは、なかなか難しいことだと思います。

幼い時から一緒に過ごすと、しぜんに受け入れ、それが当り前になってきます。保育者として「地域で共に生きていく」（健康な人も障害を持った人も一緒に生活すること）が当り前、と考えられる人に育って欲しいと願っております。それは、とりもなおさず、障害を持った人をとり巻く私達のあり方が問われてきます。人間観・価値観を問い直しながら、しぜんに交流できる機会を多く持っていけたらと思います。

美味しかったにぎり寿司

あゆみ会会長　立町　龍夫

この度、六月三日、私達利用者の為に、ボランティアで『一文寿司』さんに来て頂きました。私達の目の前で手際良くにぎられる姿を、利用者一同、楽しく拝見させて頂く事が出来ました。初めての経験の方もおり、やはり目の前でにぎられたお寿司は格別の味でした。

一文寿司さん、本当に楽しい誕生会を有難うございました。